

山岳文化環境(試 論)

田中 文夫 (神奈川県) [株式会社システム・デザイン]

鈴木 広子 (東京都) [法政大学人間環境学部]

「エヴェレストが初登頂され、地球の限界点へ到達した人類の、以降半世紀にわたる山岳文化の在り方は、21 世紀における環境社会へのモデルになる」とした仮説を立て、この考察成果を山岳文化からの提言として、21 世紀の社会の在り方を考える上での参考としたい。

I 章: エヴェレストと山岳文化環境

1. エヴェレストと環境意識

論理的に環境問題とは、人類が発生した時からつきまとう永遠のテーマである。それが現代社会においては避けて通れぬレベルにまで達し、否応なく認知せざるを得なくなった現状がある。

環境思想をひも解くと、そのルーツは先史時代にまで遡り、地球上に生命が誕生したことにその起源はあるといわれている。

知能を持った人類社会(人・文明・文化)は環境に対して恣意的に手を加え(文明的環境負荷)、その社会でより快適な生活(文化的環境負荷)が過ごせるよう進化を続けてきた。倫理的な環境問題とは、その社会が消費する環境負荷が、各々の属する環境容量に接近または、超えたところに様々な問題として発生している点にある。

リチャード・エバノフは「現代文明は限りある資源を克服するという解決不可能な

問題に膨大な労力を使うよりも、限りない欲望を克服するという問題解決にもっと注力すべきではないか」とパラダイム変換を提起している。

$$\begin{aligned} \text{論理的な環境問題} &= \text{環境容量} < \text{環境負荷} \\ \text{環境負荷} &= \text{進化エネルギー} + \text{享受エネルギー} \\ &= \text{環境} \times (\text{文明} + \text{文化}) \times \Sigma[\text{人}(\text{欲求} \cdot \text{制御})] \\ &= \text{環境} \times \text{作為} \times \Sigma(\text{生活設計}) \\ &= \Sigma(\text{生活の総量}) \\ &= \Sigma(\text{消費の総量エネルギー}) \\ \text{環境容量} &\Rightarrow \text{環境のもつ許容限界点} \\ &(\text{それぞれ環境要素に分かれて認識される}) \end{aligned}$$

まず基本に、人の心の欲求を人類存続の基本的なエネルギー(欲求)として捉え、このエネルギーをいかに環境適応制御させるかという設計(環境デザイン)が、文明と文化内容を決定づける。それらは人類の消費エネルギーにも及ぶものとされ、それを表したのが上記の式である。

論理的な環境問題への適応は、その社会がおかれている環境の中で、いかに環境容

量を維持、改善し、その環境に適応させてゆくかとする、環境容量に対する限界と適正化のバランスを図る環境技術と生活設計（ライフスタイル）の問題である。

環境問題を自然環境容量の量的バランス面から考察すると、一つの登山における環境負荷は少ない。しかしそれらがある時ある地域へ集中すると、その地域における環境負荷は破壊レベルにまで到達し、そこに環境問題が発生する。これにはマス・メディアという社会情報環境が大きな影響を及ぼしている。

これらの環境負荷を低減させるためには、環境技術の発展と共に、消費を制御する文化の在り方、つまり人の心の在り方が大きな要素となりえる。

山岳文化における高所登山は、登山者がいかに高所環境に順応して頂きへ到達できるか、高所環境における人の適応の試みの場でもあった。そしてエヴェレストは人類が徒歩で到達することのできる限界点として存在した。

1953年、エヴェレスト初登頂という地球の限界点への到達は、その結果において登山の環境負荷が微量であったことから、直接の環境破壊に至らなかった。しかし、そこに環境問題がなかったわけではない。

1953年5月29日、エヴェレストが初登頂されたことにより、人類は地球第3の極地たる標高の限界点へ到達した。このことは人類が地表の高さの限界点を足下にしたという量的限界点へ到達したことを意味し、もうそれ以上の高さによじ登ることが出来ないという文明的発展の概念すらも失う結果となった。このことにより社会における登山の価値基準は、評価価値から享受価値

へと変わらざるを得ない進化の必然性を発生させた。さらに、その登山文化における進化の過程は、単一な価値規範から多様な価値規範への移行として〔図-1〕から〔図-2〕に表した。

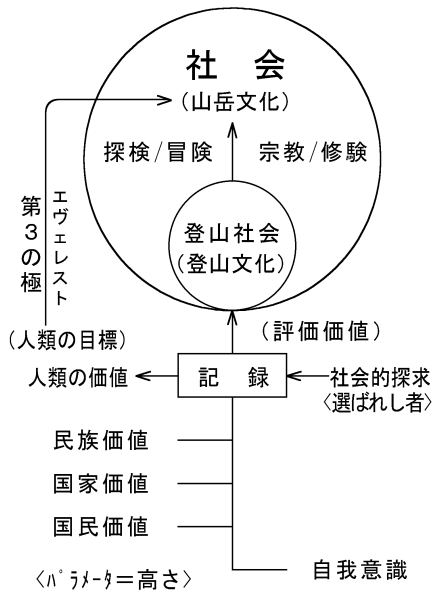
65年前(1938)、J・ホイジンガは「ホモ・ルーデンス」著わし、人類文化の本質を遊戯性から展開させた。人類が生きる意味を文化と捉え、文明への適応を図る生物学的機能とは区別した。ある特定した領域（遊び空間）におけるの作為（遊び）がもたらす緊張と喜びの感情の中に、人が生きることを享受できる精神要素の様々な現象が現れるとした。

そこで問題とされることは、「ルールなき無限な遊びは、終局には環境破壊をもたらし、文化をも破壊させる」ことにある。登山社会においてエヴェレスト初登頂までを文明的発展と捉えると、それ以降の展開は文化的発展となり、ホイジンガにより展開された、まさに「遊びこそ文化」となる。では、それからの50年、どのように登山文化は発展していったのか考察してみたい。

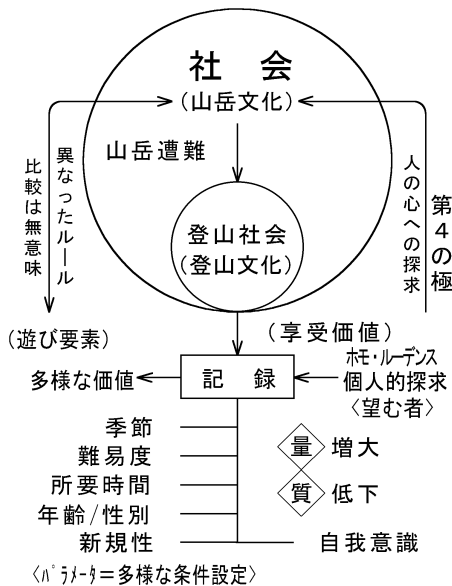
2003年、その現状を振り返ってみると山岳は人に侵され、登山文化は価値規範を失い多様化し混沌としている。また、登山文化をも含む社会環境も今だ右肩上がりの成長資本主義を続けている。しかし、そのような中でも環境に対する諸問題への意識は確実に社会へ浸透を始めている。

人が未踏のエヴェレスト山頂を目指していた時、登る人にとっては単に登山であった行為も、人類にとっては未体験ゾーンに足を踏み入れる大きな冒険でもあったはずだ。イギリスとスイスが国家レベルで競い、その競争にイギリスが勝利した結果は、エリザベス女王の戴冠式へと奉じられた。

[図-1] エヴェレスト登頂以前の
登山文化



[図-2] エヴェレスト登頂以降の
登山文化



さらに、このエヴェレスト登山の結果はイギリス国内だけでなく、人類の偉業として歴史に刻まれている。

このエヴェレスト登頂がもたらしたことは、文明がもたらす進化の非可逆性の観点において、人類が高さを追及する意味での登山の終わりを示すことになった。そのことは、登山社会における規範が新たな方向へ変化することを意味し、それは評価価値から享受価値へと変容することであった。別な表現をすれば、登山文化の中身は多様な価値を設定した多様な表現、つまり「遊びの文化」へと変化することを意味した。

そして、エヴェレスト初登頂以降の登山記録は多種多様な条件設定が行なわれ、享受価値の多様な展開がなされた。ここでは異なった条件設定間の評価は比較困難となり、比較そのものが無意味となった。

その後、人類としての目標を失った山岳文化は登山文化へと収縮し、選ばれし者の登山から望む者への登山に変わり、さらには望む者が増えて大衆化していくことになる。反面、大衆化は量を増大させ、放っておけば質の低下を招くことにつながる。このことはエントロピーの法則からも推論される。ここに量の増大と質の低下が再び新たな環境諸問題を発生させるのである。

エヴェレストやそれらに類する 8000m 峰の登頂記録は、民族的、国家的、国民的初登頂という関心の範囲では探検や冒険として評価価値を保ったが、それ以外の登山については社会からの関心が薄れた。このことは登山文化を登山社会へと収縮させ、益々社会からの関心をも失わせることになる。社会の関心事は山岳遭難が中心となり、その悲劇的な人間ドラマに専ら注目が集まるようになった。そして、ポジティブな山

岳文化の発信は社会で魅力（評価価値）を失い、登山文化内部へと収束していった。本多勝一はこれらのことを「山は死んだ」と表現し、登山から離れていく。

ホモ・ルーデンスの「遊び文化」は、第2次世界大戦後の復興経済とベビーブームにより、登山を大衆のものとした。日本では団塊世代の若者を中心に登山ブームが起こり、多様な登山が展開された。

2. 登山の大衆化と登山文化の停滞

日本に近代登山を啓蒙したのはウェストンであった。それ以前の山岳は山岳宗教を中心とした修験の場であり、他には物見遊山とする観光も行なわれていた。明治から第二次世界大戦直後までは、日本山岳会のメンバーや学生山岳部が中心となって行なわれていた。これらの人々は文武両道の気概を併せ持ち、山岳を文化として享受する楽しみを味わっている。

日本から初めてヒマラヤ遠征したのは1936年（昭和11年）、立教大学のナンダ・コット登山隊である。以降も続き、エヴェレスト初登頂3年後の1956年（昭和31年）には、日本山岳会第三次マナスル登山隊がマナスルに初登頂した。

昭和20年8月、第二次世界大戦に敗れた日本の国民は貧しく、登山文化どころではなかった。しかし戦前も戦後も、登山が好きでたまらない人々は困難な中でも登山を続けていた。

昭和39年東京オリンピックが成功裏に終わった直後から登山ブームは始まった。このことは登山社会の変化だけではなく、社会環境の変化が大きく作用したひとつの社会現象とよぶことのできるものであった。

戦後に生まれた団塊の世代を軸に復興め

ざましい工業立国日本は、社会的余剰生産も生み出すに至った。その社会風土が、若者の向上心を刺激し、物が不足している社会においても余暇を生み出し、余暇を消費する文化活動の発展へとつながっていく。

「より・・・！」とする量的発展、質的向上は、さらに刺激しあい、まさに「遊び文化」の開花である。

それまで学生や限られた社会人が活躍していた登山社会に一般大衆が大挙参入し、誰でもが好きな時に好きな仲間と好きな山へ出掛けられる大衆登山の時代となる。

団塊世代の成長に伴い、日本社会は高度成長、所得倍増の右肩上がりな成長が続き、平成のバブル経済崩壊まで、その右肩上がりの成長指向は面々と続いた。だが1990年代、日本社会はバブル経済が崩壊し社会経済においても成長の限界を実感した。それまでの社会システムから能力主義へと転換する企業が増えた。しかし、このことが量から質への転換を図ったかと言えば、必ずしもそうではなかったといえる。

倫理なき無規範な自由主義経済体制にあっては量的寡占、つまりシェアの独占こそが強者であり、正義であり続けられる必然性を持っている。「悪貨は良貨を駆逐する」というグレシャムの法則は、人間の普遍的な欲望の一面を示した古い言葉である。

このような経済主導社会を背景として、エヴェレストが登られてしまった現代の登山社会では、多様な価値の存在と享受の思想が経済的交換価値さえも低いものになっている。登山における環境問題、成長の限界を知った第3の極地エヴェレストの頂きの視点から日常社会をみると、環境に対しての思想は今だ未成熟であるといえる。

3. 環境社会に向かつて

かつて人類が山頂を足下にできなかった頃、人は山を神々と崇め、畏敬の念を持って接していた。このことは、日常的な目線からではなく、非日常的な山岳に対して高峰の目線から神を同一視する古来の思想に基づいている。

ニーチェはニヒリズムの克服の中で「神は死んだ」と言い、このことを山岳に当てはめてみると、エヴェレストを足下にした人類にとっての「山は死んだ」のである。神は死に、山は死に、人が神の座にとって代わったかのように振舞う人間中心主義のもとに、万物の王は選ばれた人なのか、まだ証明されていない。しかし人の知能は計り知れない。それは宇宙、地球、人類、社会を分析し、自らの心までをも分析する。

しかし分析結果をどんなに多く蓄積しても、それを再構成する能力がなければ、形にはならない。そこで新たな着想を見出し、豊かに創造するために、思想・哲学が必要となるのではないだろうか。

分析への探求は科学と呼ばれ、現代科学の分析データ量は膨大に膨れ上がっている。そして、それ自体が知識として蓄積されている。しかし現代において地上の目線ばかりでは、真実の裏側にあるものが読み解けない。だからこそ人類の目線は今、地球第3の極地エヴェレストを越えた宇宙空間へと飛翔し、さらには移動体目線と呼ぶにふさわしい電子カメラを宇宙探査機に搭載させ火星や木星さらに遠くの宇宙を飛翔している。だが、この宇宙の目線からの思想体系は、まだ示されていない。

閉じられた系にあってはエントロピーが増大し、やがて内部のエネルギーは平衡する。この地球において文化を生き生きと楽

しむためにも今、人々は心への探求をお笑いで誤魔化さず、自らの生命をもって挑む在り方を一度見直す時期に来ているのではないだろうか。一人一人の小さな哲学を学問という知識の系の中に閉じ込めずに、小さな体験と思索のために開放させることにより、人の心への探求につながる計り知れない神秘と深い領域が待っているとえよう。

こうした動きは、新たな環境社会に向う人類社会が見直す出発点ともいえる。また、それが人間社会の持続的生存を意味する原点にもつながっていくように思える。

II章：山岳文化環境の構造

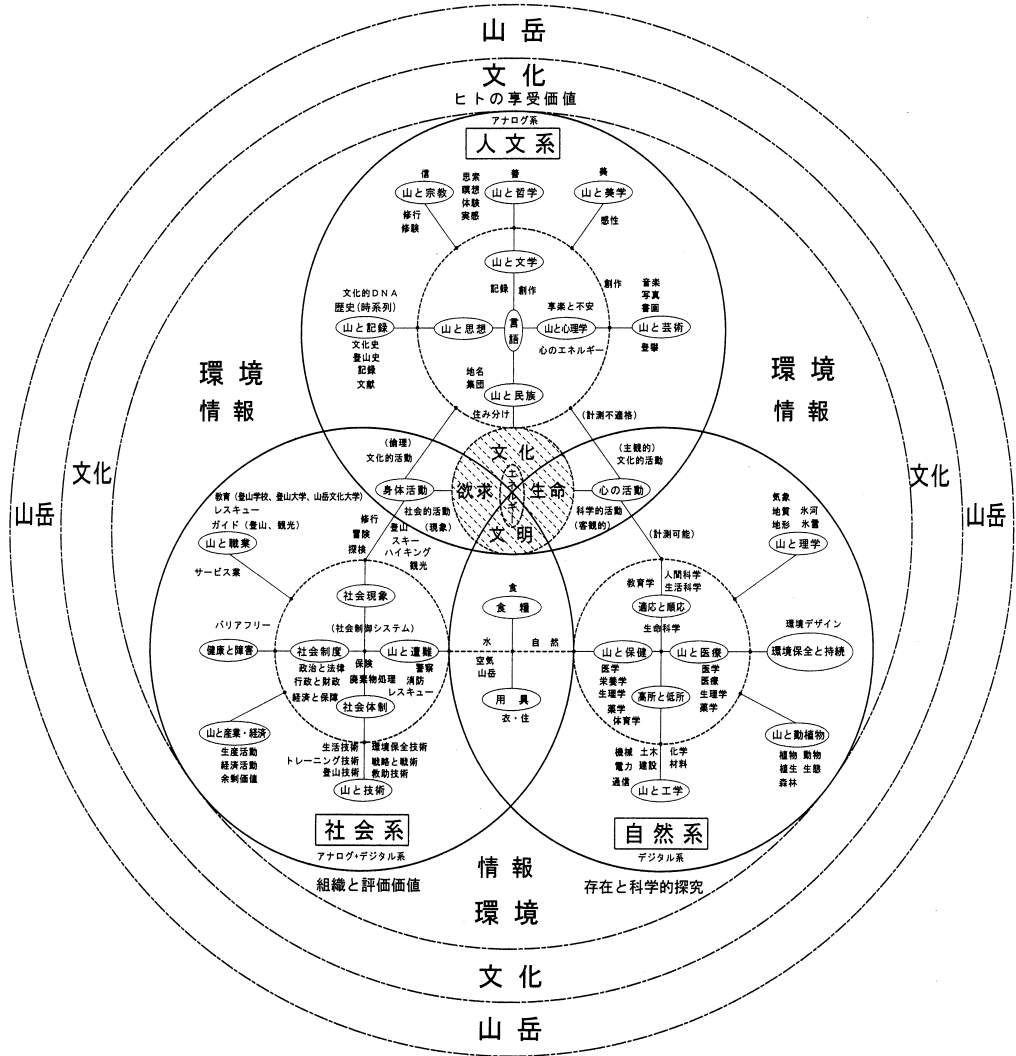
この章においては、山岳文化を総合的に捉える試みとして、その相関を〔図-3〕に「山岳文化環境」として示した。

山岳文化は山岳に関するあらゆる事象を対象とし、またあらゆる生活の営みにおける喜怒哀楽を享受する価値規範をも伴うものとして位置づけをした。しかし、あくまでもここでは山岳を通して味わうことの出来る享受、評価価値を持った総ての営為(いとなみ)を対象とした。

〔図-3〕に示したよう、「人文系」「社会系」「自然系」の三つの系に分類し、それぞれの系が重なる領域に「文化要素」「文明要素」の方向性を示した。これらの営みを続ける「生命」「欲求」は「エネルギー」として中軸をなしている。近年では複雑系が論じられ、インターネットが普及しているように、相関表現もまたインターネット・ウェブに似た蜘蛛の巣状となっている。

実際の関連づけとしてZ軸を加えて三次元的な表現にしたいところである。なぜ

[図-3] 山岳文化環境



なら、同一環境の中においても、上下、強弱、大小等々の様々な階層からなる要素こそが、人類の文化エネルギーを産み出す土壌となっていると考えられるからだ。

そこで山岳文化環境を三つの系に分類し、以下に表わす。

人文系：人の個たる主観からの享受価値
社会系：人が重なる社会面での評価価値
自然系：人の主観を取除き、客観的言語
又は記号による表現を科学的な
面から真理へ迫る探求

階層をともなったこれらの系がさらに絡み合い、現実には複雑に反応する。それら総ては複雑系にあって総体を把握しようとするパラドックスに陥り、絶対的限界の全てを掌握することは不可能に近い。

より限界点に近づくZ軸の視点は、形而下において、より多くの事象を把握することが可能となる。このことはまた人の意識を啓発し、形而上の更なる意識へと発展させることも可能とする。

人は個人としての存在と組織の構成員たる存在と二重に規範を受けている。個人の自由か、組織の一員か、本音と建前を使い分けるこの二重規範は互いに矛盾した側面を持ち、人に喜びや悲しみ、自由と束縛等々、立場の違いにより相克する二つの感情をも発生させ、そこには矛盾した存在を生み出す。

人は各々が属する環境領域において享受する価値観と、評価する価値観を併せ持つ。享受する価値観は個人の行動エネルギーとなり、評価する価値観は社会

面での活動エネルギーとなる。また人が技術を用いて未知なる真理に出会い、さらに真理の深みへと到達する努力は、時の文明を進化させ、新たな文明を切り開く原動力ともなる。その文明が持続出来るか衰退するかは、時の環境における適応度として一つの指標ともなる。そこで適応度を検証し、いかなる方向へ導いたら良いのかは、時の文化が決める。このように「人」・「文明」・「文化」の関係が絡みあいながら、また時間の経過と共に人類社会は持続している。

その時の流れのなかで、山岳は多くの岳人の生命を飲み込んできた。また、その反面、生命を賭けて値する領域でもあった。しかし現代においてその領域は、プライバシーとして扱われ、文化的な側面からの探求が行なわれなくなっている。

しかし、改めて考え直してみると、50年前に標高の限界を超えた山岳文化環境は、21世紀の中で、大いなるパイオニアワークを発揮する機会でもある。だからこそ、山岳文化をもう一度平地の目線から見直すことにより、20世紀に醸成された文化が、新たな21世紀の文化として更なる発展をもたらすと考えられる。

1. 人文系山岳文化環境

人文系山岳文化環境とは、山岳に関わる人間の持つ文化的側面である。人の二重規範のうちの個たる側面で味わう、ヒトとしての享受価値の在り方を示すものである。

一般的に日本では、文明と文化の区別が定かでなく、時として同義語として使われる場合もある。しかしここでは、物質的な文化を文明とし、精神的な文化を

文化として用いながら考察をして行きたい。

文明とは技術によって物質を手段に変え人類の持続的進化を促す分野として捉えられる。その中においては、環境に適応する文明は持続し、適応できない文明は滅びてしまう。文化とはヒトが群れを成し、社会の中で喜怒哀楽を享受し、その中から受ける価値に基づいた価値体系である。そこには人の意思が反映し、また作用する。

環境を破壊に導くのも、環境を保全するのも、人間の持つ価値観が作用する。それを単純式として表わしたものが下表である。

社会 = 人 (文化 × 文明) < 環境容量 ∴ 環境に適応
社会 = 人 (文化 × 文明) ≍ 環境容量 ∴ 環境の保護
社会 = 人 (文化 × 文明) > 環境容量 ∴ 環境を破壊

2. 社会系山岳文化環境

人文系を人間の享受価値の系としたのに対し、社会系は組織からなる評価価値の系と位置づけた。

社会のなかで持続的発展を遂げる産業や職業、共通ルールとしての諸制度、実施するための体制や技術、上手に楽しむための学習や失敗へのバックアップ等々がそれにあたる。一方、災害や緊急時における山岳を通した生活技術、指揮命令行為、レスキュー組織の活用、火災時のビル下降技術などは山岳文化技術の応用として役立つことは明白である。また、人文系のもたらす精神面での修養は、非常事態における心の安定にも役立つと

考えられる。

人類初の 8000m 峰 (アンナプルナ) 登頂者モーリス・エルゾグの名言「人間の生活には、他のアンナプルナがある」このことばから察しても理解することができる。

このように、山岳文化のエキスを社会系に積極的に応用することで 21 世紀の環境文化社会において、多大な貢献が可能と成りえるのではないだろうか。

3. 自然系山岳文化環境

この分野は一般的に科学部門に属している。科学的探究による分析成果をもとに普遍性のパラメータ、定理、公理、法則等を明確にさせるべく客観的表現作業を行う。これを山岳を取り巻く存在として捉え、その環境を科学することに主眼をおく。

文学同様、自然系にも「山岳」を冠す必要はなく、すでに社会に受け入れられてきた分野でもある。自然を客観的に捉え、科学的論述が正しければ、誰も異論をはさむ余地がなく受け入れる。だからこそ個性表現を苦手とする日本人にとっては、得意な表現分野でもある。

また自然系は文明的発展を担い、その練磨はより合理的で無駄の少ない技術となって環境負荷の低減を図ってきた。

現代文明は川沿いの平地に発祥し、そこを主场として栄え、発展し持続されてきた。なかには例外として高地に栄えた文明もあるが、それは短命に終わっている。

環境破壊を顕著にさせる現代文明の車社会は、平地を舞台に展開されている。

その価値観は勿論、平地における視線に基づいている。だが、この目線からの延長にある価値判断では、これからの環境社会に適応するには困難が伴うであろう。

人類は平地という二次元社会での紛争解決を、戦争でおこなってきた。しかしネパールのように低地から高所山岳地帯へと垂直分布した住み分けは、大きな戦争回避の手段となる。現在、人工問題を抱える人類は、三次元での住み分けを考えなければならない時代に入っているのかもしれない。これまで平地の視線で体系づけられてきた文化に山岳の高さを加え、さらにZ軸の視線も絡み合わせると、果たしてどのような再編成が出来るのだろうか。

人類にとって山岳文化の自然系における科学的提言は、今後の社会的進化、適応を図るうえで、新たな手段と方法(技術)として考えられることが可能である。

※ ※ ※

以上、山岳文化を大きく三つの系に分類してみた。さらにこれらの系は相互間で複雑な関連をもたせながら進化してゆくであろう。

参考文献・参考資料

- 1) 小原秀雄監修『環境思想の出現』東海大学出版会(1995)
- 2) リチャード・エバノフ『環境思想と社会』東海大学出版会(1995)
- 3) J・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』中央公論社(1971)
- 4) R・カイヨワ著、清水幾太郎・霧生和夫訳『遊びと人間』岩波書店(1970)
- 5) 本多勝一『山を考える』実業の日本社(1966)
- 6) 田中文夫『頂のかなたに』日本文学館(2003)
- 7) 斎藤一男『山岳文化』日本山岳文化学会(2003・創刊号)
- 8) モーリス・エルゾーグ著、近藤等訳『処女峰アンナプルナ』白水社(1960)

Mountains culture environment

Fumio Tanaka

Hiroko Suzuki

The point of an argument

We will argue for the environmental design on the basis of mountains to be considered as a key which explains environmental problems and the human beings first recognized in the end of the 20th century. Accordingly, the mountains culture having been studied separately will be able to be reorganized into the system of mountains culture environment.

Now, some problems of the natural system represented by CO₂ reach even an environmental problem, and their data and measure are important. However, the larger problem is to re-think the human beings ultimately the state of the culture s in the society, and the state of people's lives ever since the 21st century. The state of people's mind becomes important, for a social system to keep up with its development.

In 1953 Mt.Everest was first conquered and has reached the ultimately attainable in the mountain-climbing society. How has this mountain-climbing society changed for the last 50 years? The verified data during the past half-century will become a model reflecting upon the environmental culture in the 21st century.

Mountains culture has developed until now except an everyday place. We can see the aspect of the digital culture in which reality and virtual images are mixed in confusion. This also means the limit of a sphere that the present mountains culture is placed.

This trial can be recomposed as mountains culture environment which unifies the civilization system, the social system, and the natural system. The pursuit to man's mind which can be said also as the 4th polar region found beyond Mt.Everest must be returned and proposed to everyday society.
